

の文字を作り、遠き江を遠江と號す、故にこれをちかつあふみ、とふだあふみともいふ、山谷の瀝滴所八百八河とはいへども、是はたゞ物の多きをいふのみ也、凡湖邊山谷の流末大なるは四十ヶ所ばかりにて、其餘數えれず、水海とは満干なき故なり、鹽ならぬ海ともいふ、又あふみの海とも云、歌にははてるやあふみのうみとよめり、鴉の海といふは、いかなる事とも未詳、うたがふらくハ難波の枕詞をしてるといふに同じかるべし、おしてゐるは襲ひてるとの義なれば、にははにほひにて、うすく照るの義にもあるか、又鴉島とは、此鴉の海に多く住ものなれば名付たる俗にカイツブリと云、琵琶の海とは、海の形似たるを以て號けたり、凡勢田より海津まで南北二十里、東西の廣き所凡九里、今津と佐和山の間尤廣し、北は濱村、西は海津、中は太浦、東は鹽津也、北は山を隔て越前に隣る、略中狹々浪とは、日本紀神功紀に、さゝ浪と計にてあふみの事とす、サ、は小の意にて、淺水の貌なり、萬葉に、石走る近江の國、樂波の太津の宮ともよめり、三津の浦といふは、志賀の浦をいふ、これも元は御津也、太津なり、

傳曰、孝靈四年、江州の地拆て湖水始て湛、駿州富士山忽出焉、景行十年、湖中竹生島浦出云々、或云、此説信すべからず、

〔こし地紀行〕近つ淡海の湖波に似たる物なく、いと平かたして蒼々たり、見るが中に山嵐波を起して、秋の景色定まらず、つくぐと眺めて打過ぬ、

夫琵琶湖南北十九里、東西七八里、里俗稱九十九浦名、是日域大湖也、若狹三方、越中布施、信州諏訪、雲州松江、奥州磐梯、雖有諸湖、豈較其廣狹、況地接京城、風人雅士多來此留題、真奇觀也、其藻臥東鰯等、湖中美産也、

渺々琵琶湖徑 北南十九程 烟波船出沒 砂艸鳥縱橫 瀟湘曾同景 龍宮長闕城 魚蝦皆美物 吟咏古人情